

## 市場経済は社会主義に入り込めるか

友 岡 學

まえがき

- 【1】 白旗を掲げる社会主義
- 【2】 商人を憎む余りに……
- 【3】 市場（経済）対戦場（経済）
- 【4】 市民はどこに？

あとがき

まえがき

『社会主義の理念と現実』と題する経済理論学会年報第25集（'88，青木書店）が送られて来た。これが第35回大会共通論題である。

一人（佐藤金三郎，横浜国立大）が「問題設定について」語り，三人が報告し，合同討論が添えられている。

報告は，平田清明（神奈川大）「社会主義のプログラマティック」，岡田裕之（法政大）「社会主義の現実と労働価値説の批判的展開」，田中雄三（竜谷大）「社会主義経済の市場性——ソ連経済改革の分岐点——」。全体的なトーンは，当然といえば当然だが，暗くてうら寂しい。

社会主義には「現実」ばかりがあって，「理念」というものが果たしてあったのか。そんな思いがする。

かつて私もその「理念」を一所懸命追い求めたことがあった。社会主義「現実」が挫折するずっと以前に，私は「理念」を追求するのを断念した。そして自分が現に生活している現実には，むしろあれ程探した理念の実像が，それとして自己主張するでもなくさりげなく存在しているのに気付いた。マルクス教徒は気付かず，それを無心に満喫しながら，そして人に向かってそれを捨てよと主張し続けた。その状態もそろそろ終わる。挽歌のはしりの一つが今回の報告集であろうか。

それでも，愚かさは容易に抜けないもので，長砂実（関西大学）『「社会主義日本経済」構想に係る諸問題』なんて分科会報告がある。本人の生真面目さは措いて，茶番としか言いがたない。ピエロは自己認識を失わないだろうに。

初めて知ったのだが，それによると，1961年採択の日本共産党の現綱領に「社会主義日本」目標があって，それが今も生きているらしく，報告者は社会主義諸国現実の失敗に合わせながら，マルクス教義を曲げてまでして弁護しようとしているようである。

質疑応答の部で，問われた長砂氏は「われわれとは，『社会主義日本』の実現を希求する全ての人びとである」（276頁）と答え，「現存社会主義の歴史的経験に照らせば，抽象的に社

会主義と商品生産との非両立性についてのマルクス命題のうえに安住しておれないことは確かである。社会主義的生産は、なんらかの程度、なんらかの意味において、商品生産という性格をもたざるをえない、というのが、今日の社会主義経済の常識となっている」（276頁）と言って平然たるものである。こういう人が生きる余地があるのが日本だ。幸いなるかな資本主義国日本。

恐れいりました。マルクス教義がこんなに融通無碍・変幻自在なものとは知らなかった。あの頃それを知っていたら、私など苦心するまでもなかっただろうに。

それも生きのびるためのノウハウなのだろうか？ しかし、飢え死にしても私は「否」である。マルクスは異郷のロンドンで、事実上餓死した。彼の理論に疾うから異義を唱えて来た私だが、彼の生き様には共感するところが多い。

ところが私の共感と違って、マルクス教義は、それを国是とするかの社会主義諸国で、支配者たちの特権的生活に拠り所を提供しているのだ。下記でキッシンジャー氏が言う「マルクス主義」はともかくとして、現象としてのマルクス主義論には賛成せざるを得ない。

「多くの発展途上国にとって、マルクス主義の魅力は、政治権力にしがみついたための道具としてのものです。マルクス主義は永続的なエリートのための理論であり、これは共産党のメンバーにとってすこぶる快適なものです」（キッシンジャー博士の地球診断 マルクス主義？ エリートのためさ）THIS IS, '88・10, 262頁、傍点は友岡。

学会の雰囲気は「うら寂しい」と言った。佐藤金三郎氏はこの問題設定についての説明の中で、3番目の理由に、「今日ほど社会主義の権威が地に落ちている時代はない……。……敗戦直後の学生時代……は社会主義……は希望の星でした。ところが現在、学生たちと話しておりますと、……社会主義経済というのはほとんどだめ経済と同意語であり、その代名詞にほかならないと考えている。そういう状況なのですね」（11頁、傍点とゴチックは友岡）。「だめ経済」とはよく言ったものだ。先生方はどうなのか？ それが――

「マルクス研究者、特に理論研究者の間では『社会主義』というテーマに触れたがらない、いわば敬して遠ざけるという状況があるのではないだろうか」（11頁）。

更に言う。

「……われわれマルクス経済学を日ごろ研究するものとして当然考えていなければならない社会主義の問題が、とかく敬遠されるか回避されるという風潮が現にあるのではないか。……私のような理論の研究者は、教室では、マルクスにしたがって商品・貨幣論の講義では、こう申します。社会主義になれば当然に商品・貨幣はなくなるし、またなくなるはずだ、と。ところが、現存社会主義の諸国では、ちっともなくなっていない。なくなるどころか、ますます盛んになっている。そういうことから、理論の研究者はとかく『資本論』の解釈学が社会主義の『理念』論に終始して、結局は社会主義の『現実』は黙殺するか回避するという傾向がある」（14頁、傍点は友岡）。

もういいだろう。滅入るばかりだ。何か起死回生の手立てはないのか。

## 【1】 白旗を掲げる社会主義

戦争は始めるのより終えるのが難しいと言われる。今回のイライラ（イラン・イラク）戦争にしても、だらだらと8年余にして、ようやく終わる目処がついた。

日本について言えば、特に「革新」派において、太平洋戦争の開戦責任を問う声が高い

が、それも開戦時ではなく、自分の身が安全になった戦後であり、しかもその声の持ち主は殆ど、あるいは全く、「終戦責任」を問うことはない。因に、内村剛介氏は、アレクサンドル・ジノヴィエフ「グラスノスチでなく、言論の自由を」(原題「共産主義の科学的批判」, 染谷茂訳, 中央公論, '88・7)の「解説」で、「革命倫理, 暴力の是非善悪, つまりは戦争責任よりもはるかに罪深い『革命責任』論——それが20世紀の世も末になってやっと日程に上がって来た」と言う(118頁, ゴチックは友岡)。

戦争。そう、社会主義は1917年のロシア「革命」以来、いわば資本主義に戦争を挑んできた。ルーツをもっと遡れば、思想的にマルクスの1848年『共産党宣言』以来である。これは資本主義に対する「宣戦布告の詔勅」に相当する。資本主義は社会的悪の根源である。資本主義を打倒しない限り、労働者、ひいては人類の解放はない。決起せよ、万国の労働者!

労働者ではなかったが(ただし、アルバイトに頼る間欠的日雇い労働者), 正義感溢れる(?) 貧乏学生の私も釣られた。以来、かなりな時間、貴重な精神と知力養成時期を空費することになる。今では、なまじっか生真面目だった我が身を恨めしく思い、またそれで良かったのだと納得もしている。

しかし、よくよく考えるまでもなく単純なことだが、「大革命」という名の戦争によって葬られたのはロシア資本主義では決してなかった。葬られるにも、それに値する資本主義はロシアに殆ど育ってはいず、あっても萌芽もしくは極く幼稚なものでしかなかった。このことについて、暫く言葉を費やそう。

レーニンは、『ロシアにおける資本主義の発展』でマルクス命題を実証しようと懸命に努めたが、時期が時期でもあり㊟、総括的に評価すれば、せいぜい西欧的価値観に基づいたブルジョア革命の条件が形成されているかどうかという程度の段階であったというのが、本当のところであろう。

㊟ この著作の公式発刊日付は必ずしも確定していない。本人序文(1907年7月)には、「本書はロシア革命の前夜の時期に、1895—1896年の大ストライキの爆発のあとに始まったところの或る中休みの時代、に書かれた」とのみ記されている(大山岩雄, 西雅雄訳, 岩波文庫上巻, 第2版への序文)。状況証拠から「本書の印刷終了の時期は、1899年の3月—4月上旬と見做さなければならない」(同, 註一, 342頁)。

レーニンは、ナロードニキに拘り過ぎたようである。恐らく、ナロードニキとの差を強調する政治的必要から、勢い余ったのであろう。彼は、締め括りの「第八章 国内市場の成立 六 資本主義の『使命』」でそれを吐露している。

「資本主義の歴史的進歩性を承認することはその弁護を意味するかのよう<sup>①</sup>に事態を説明しようと全力をあげて努力しているナロードニキこそ、正にこのナロードニキこそロシアの資本主義の最もな深刻な矛盾の過小評価の(そして屢々黙殺さへもの)誤謬を犯し、そして農民層の分解や、我国農業の進化の資本家的性質や、分有地を有する農村のおよび営業的賃金労働者階級の形成を塗抹し、有名な『クスタール(家内)』工業における資本主義の最も下等な且つ最も劣悪な諸形態の完全な支配を塗抹するのである」(同, 下巻, 197頁, 傍点は友岡)。

仮にそうだとしても、レーニンこそ「過大評価」の過ちに陥っていると思える。何故なら、「資本主義の最も深刻な矛盾」が発生しようにも、「資本主義の最も下等な且つ最も劣悪な諸形態」が完全支配しようにも、ロシアが既にその域に達していたとはとても言えないからである。これは、彼自身図らざることだったろうが、次の記述に示唆されている。ちょっと長いが、敢えて引用しよう。

「……ロシアにおける資本主義の発展が緩慢であるかまたは急速であるか、といふ問題についていへば、すべはこの発展を何と比較するかにかゝってゐる。ロシアにおける前資本家的時代を資本家的時代と比較すれば（そして正にかゝる比較こそ問題の正しい解決のために必要なのである）、資本主義の下における社会経済の発展は極めて急速である、と認めなければならぬ。発展のこの速度を技術および文化一般の近代的水準の下において可能なるべき速度と比較すれば、ロシアにおける資本主義の発展は実に緩慢であると認めなければならぬ。そしてそれは緩慢たらざるをえないのである、何故ならいづれの資本家国においても、資本主義と両立しえないところの、その発展を阻害するところの、『資本主義のためにも資本主義の不十分な発展のためにも苦しむ』生産者の地位を法外に劣悪化するところの、往時の諸制度が、かくも多量に無難に残されはゐなかつたからである」（同、下巻、202～203頁、傍点は友岡）。

コメントしよう。

- レーニンが我慢ならなかつたロシアに充満する「最も下等な且つ最も劣悪な諸形態」は「資本主義の最も深刻な矛盾」の発現どころか、むしろ「（西欧資本家諸国においては）往時の（ロシアにおいては現今の前資本主義）制度」に由来すると言った方が正確だろう。
- したがって、ロシアの「最も深刻な矛盾」は、ロシア資本主義自体の内的矛盾ではなく、典型的に言えば、ロシア農奴制度と資本主義との間の矛盾、実態に即して言えば、資本主義の発芽・成長を抑え込もうとする、あるいはツァーリズム体制内に取り込もうとする帝政自体の矛盾、言い換えれば、自らの「前」または「非」近代体制を維持しながら近代を達成しようとする矛盾（今の社会主義はそれと何と瓜二つであることよ！）にこそ外ならなかつた。（今、ふと、トルストイがヤースナヤ・ポリヤナの領地を農奴に解放して死の旅路に立ったのは1905年であつたことを思い出した。日本でも有島武雄だったか、トルストイに倣って小作人に土地を自発的に解放したということがあつた。）
- 周知のことだが、率直に言って、1917年においてさえ、ロシアにおける「革命」はレーニンにとって早過ぎたものだったので、かなり後まで西欧の「革命」にリードされるまでの繋ぎ的役割を果たすという任務を自覚し、ひとえに西欧先進資本主義国の本物の「革命」を切望したのだつた。
- 以後、「革命」はマルクス、レーニンを裏切つて、全て、資本主義（が最も発展した諸国）には全く起こらず、むしろ資本主義が未発達・未熟な、どちらかと言うと「非」または「未」資本主義に起こつた。そしていずれも、さしたる（資本主義）経済的理由もなく、軍事的・国際政治的勢力・権力の争奪戦であつた。だから、それらの諸国の経済的生産および生活水準は、「革命」後の年数に差があり、かつそれぞれの国に歴史や風土的条件の差があることを承知しながら、敢えて総括すれば、「革命」前体制が

そのまま継続していても達していたに違いないと思える程度以上ではないのである。

以上のことは、日本の幕末期にプロレタリア革命の機会が熟していたかどうか思い返せば、大体の状況で分かる。当時、幕府は北方からのロシアの脅威に神経を費いやされたけれども、やはり主たる相手は東・南方からの西欧諸国であった。顧みると、今同様に、日本の方がはるかに進んでいたのかも知れないのである。今日のソ連と日本の原型を見る思いがする。

日露戦争で結果的にロシアは日本に敗れたが、ロシア国内の革命騒動を措けば、最後的には、双方伸び切った兵站線のどちらが先に切れるかの我慢比べ状態になった。その時、日本には実際のところもう余力が残されていなかったのである。余力があると見せて矛を収めるのが最善の選択である。ロシアに今少しの精神的ゆとりがあり情報戦に長けていたらどう転んだか、日本にとって全く危ういタイミングであった。しかし、幾分牽強付会であるが、そこに明治維新を経て立法議会を持った立憲君主制の天皇制日本帝国とツァーリズムのロマノフ王朝ロシア帝国とのいわばソフト面の差が、決定的なハード面の差を埋めて余ったということであろうか。

要するに、ロシア「大社会主義革命」の前にも後にも、「革命戦争」に敗北した資本主義は未だ一つもなく、むしろ刀折れ矢尽きたのは、皮肉にも戦を挑んだ共産党社会主義自体であったことが、その後の、そして今までの歴史的現実であった。恐らく今後も、であろう。

何故なら、今共産党支配の社会主義諸国は、一、二の偏執狂的国家を除き、雪崩を打って不俱戴天の敵資本主義「軍門」の前に恥も外聞もなく跪いて助けを請い、生き残り術の教授を請うているからである。

マルクスの「開戦の詔勅」以来140年、レーニンの実質「宣戦布告」以来70年、マルクス教社会主義は、自国「人民」に苛酷な肉体的・物質的・精神的苦痛と犠牲を課しながらも敵に殆ど手傷を負わせることなく、戦線分裂状態のうちに、今漸く軍旗を巻きつつある。

スターリン体制下の犠牲者数は、ナチス・ヒトラーがもたらした死者数に比べられないだろうか。㊤ 毛沢東体制下の「国共内戦」と「文化大革命」による犠牲者数は、日本の侵略戦争がもたらした犠牲者数に匹敵しないであろうか。

㊤ こう書いた後、タイミングよく、AERA ことアエラ (No22, '88・10・18) が届いて、これが確められた。敢えて、書き改めないでおく。「ソ連マスコミ最前線アガニューヨーク編集長が語る ゴルバチョフ 微笑の奪権」に、小見出し「スターリンが殺した人間の数はヒトラーに匹敵する」があり、ビターリー・コロチッチ編集長は「私は、スターリンが殺した人間の数はヒトラーが殺した人間の数を下回らないと思う。しかも彼は、自分の国の人民を自分の国内で殺したのです (傍点は友岡)」と言っている。

ソ連はよく、第二次大戦中の外国(ドイツ)による自国民の犠牲を引き合いに、いかにソ連が平和愛好国であるかを語る。しかし、社会主義自体による自国「人民」の犠牲を引き合いにして何かを語ることはない。ましてや、他国「人民」、特に事情を異にする日本「人民」兵士「捕虜」の強制収容所送りについては無言を通して。日本政府も何故か遠慮している。自国「人民」の『収容所群島』を書いたソルジェニツィンは国外に追放され

た。もちろん、収容所体験を書いた元日本人「捕虜」は無事である。

この頃になって、死者の「名誉回復」なる措置が散発的になされ、スターリン批判は必ずしもタブーではなくなった。これらとて、今のところ、しないよりはまし、という域を越えるものではない。まして、共産党が自発的に「人民」に公式的に詫びて、人民への権力返上によって責任を取るなど、当座全く考えられもしない。

全体的に観察すれば、社会主義諸国は各個バラバラに資本主義諸国と非公式な「単独講和」方式で済し崩し的に接触している。共通しているのは、どの国も社会主義の公式的敗北宣言を行っていないということである。

対して、種々の來雜物を取り去って見ると、資本主義（諸国）は、武士の情か惻隱の情か、水に落ちた犬を敲きもせず、過去に蒙った迷惑を水に流し、「それ見たことか」と怨念を吐き出すでもなく、悔悟を説教するでもなく、駆け寄って助け起こし塩を送ろうとさえしている。鷹揚なものである。あるいは、窮鼠に噛まれるのを予防しているのかも知れない。日本などはやや及び腰でさえある。

そして、これまでのところ共産党は決定的な敗北宣言を内外から求められることなく、権力維持最後の一線だけは保守し続けているし、今後も力づくでも死守する気構えのようである。しかし……。

しかし、いつまで持ち堪えられるか。

今日現在激動して行方未だ定まらない変異社会主義国ビルマは、社会主義国の将来についての一つの予兆かも知れない。ビルマの特異社会主義政権は、自らの手で、ついに「開放」政策を採り得なかった。類するのに、皮肉にもビルマに国交断絶された、こちらも特異さが目立つ社会主義国北朝鮮がある。序に言及すれば、ソウル五輪にビルマは参加し、北朝鮮はついに参加しなかった。共同開催の主張が通らなかったことを理由にしているようだが、それは口実であって、私はむしろ初めから不参加目的の実現のための戦術的共同開催主張であり、見事成功したのだと見る。拒否されて祝杯を上げたであろう。もちろん、「人民」には拒否の不当をなじり、見るに値しないと、様子を見せもしなかったろう。

あるいは、農業、工業、国防、科学技術の「四つの現代化」という中国の国家目標が、「深圳の香港化、広東省の深圳化、海南島の台湾化、そして中国全土の広東省化」（中島嶺雄「竹下総理に見えなかった開放中国これだけの混迷」諸君！、'88・10、69頁、傍点は友岡）で実際に追求されていることは、別の将来像を示唆しているだろう。

要するに、「四つの現代化」は「資本主義化」の婉曲的言い回しであるということだ。実態的には、社会主義の大陸中国と資本主義の台湾中国との間の「戦争」は、まさに「もう完全に勝負があった」（中島、同上、68頁、傍点は友岡）。昔、毛沢東は「解放区」、今、鄧小平氏は「特別開放区」を言う。それで驚いてはならない。びっくり情報がある。

その後党を追放された方励之（前中国科学技術大学副学長）氏は、「マルクス主義はすでに過去のもの」「役に立たない」と死を宣告し、同じく党を除名された作家王若望氏は「わが国は資本主義を導入しなければならない。わが国は封建主義の根の上に社会主義を継ぎ木<sup>77</sup>しただけ」「ブルジョワジーの自由を支持する」と日本マルクス教徒の顔色なからしめ、香港左派系紙「争鳴」（'87・11）は「黨員の心がすでに死に、幹部の心が死に、民衆の心が死んでいる」と慨嘆する（評論「共産党主義に絶望する中国——つもの大衆の不信——」選択、'88・1、41頁）。

更に、「香港における中国政府の代表である新華社の許家屯支社長が、資本主義制度を極めて高く評価する発言をした……」（『資本主義は偉大と評価』中国・新華社の香港支社長」毎日新聞、'88・3・24）。中国の雑誌「経済社会体制比較」とのインタビューで語ったもので、22日付の中国系香港紙「文匯報」はこれをトップで報道した。

「許支社長は『一部の同志は現代資本主義制度が人類文明の偉大な創造物であることを理解していない』と指摘、『現代資本主義には今後、非常に大きな発展の余地がある』と資本主義賛美とも受け取れる発言をした」

新しい動きもある。ハンガリーで9月に民間「民主戦線」が事実上野党として旗揚げした後、ポーランドでも「野党組織」が事実上公認された。知識人と宗教家の2団体で、「政党化」へ活動開始と伝えられた（毎日新聞、'88・10・10）。「政治目標を掲げた民間組織が合法活動を認められたのは47年に同国が共産化して以来初めて」しかし、順調に行ってまともな政党が実現するには、まだまだ紆余曲折があるに違いないし、これが他の社会主義諸国に早々伝播するとも思えない。

以上、いわば「発展の不均等」がいよいよ目立ち、遠心力が最早抑えようもなく働きつつあるのは事実であるが、次のことはますます明確になったと言ってよいだろう。

社会主義国の国家としての生き残りの試金石は、共産党独裁の断念、したがってまた資本主義幻影を打倒した信じてごり押し的に作り上げた社会主義幻想・錯覚からの離脱、この一点に凝集している。約めて言えば、社会主義国は、国家としては、社会主義放棄によらずには生存できそうもないということだ（私の「社会主義——この壮大な錯覚の由来」〈本誌、第37号、'87〉を参照。尚、序に「経済学における政治言語」〈同、第34号、'85〉も）。

それでは『共産党宣言』に釣られて諸共産党が打倒資本主義の革命戦争を挑んだ対象は一体何だったのか。ドン・キホーテには眼前に回転する風車であったが、共産党にはマルクスの催眠術にかかって見た資本主義幻影でしかなかった。オランダやスペインの風車は、今では歴史的文化財として保存の物件であるが、現実資本主義は（遠い未来のことは知らず）無傷のまま未だ旺盛な生命力を保ち続けている。

ここで私がふと気付いて思ったのは、マルクス教聖典『資本論』序文の最後に記された「人の言うに任せよ」という重い言葉は、完全にマルクス教徒には全く無縁になっていることだった。日本について言えば、マルクス教に忠実な人ほどあの貧乏な（子供の棺桶さえ買えない惨めな）マルクスの生きざまから離れ、資本主義を悪しざまに罵りながら彼生涯の遺作『資本論』に生活の糧としてしがみ付き、同病相哀れむ式に寄り合って、それこそマルクスが理想として希求し、本人には思い及びもしなかった資本主義的達成の「共産主義」的生活水準・様式を既に満喫しているように、私には見えてしょうがない。

つい愚痴ったようだ、私はマルクスほどの貧乏は御免だが、程々の貧乏はどちらかというとう好きである。貧富が選べるなら、今の私は貧を選ぶ。ただし、その差が絶対的でない限りである。何故なら、いつ富を選びたくなるか分からないからである。だが先は短い。

## 【2】 商人を憎む余りに

〔大学院入試問題（抜粋）〕

今、社会主義国指導者たちが一番困っていること、それは何か？ ○×で答えなさい。

マルクス・レーニン主義についての国民の無関心——×

ウオッカ（アルコール、酒）嗜好——×

官僚の抵抗——×

.....

商人の不在——○

今、先を争うように、市場（経済）よ、市場（経済）よと社会主義国は叫ぶ。市場（経済）に背くことこそ人間解放の道であると、マルクスが教えたのにである。

ユダヤ人と言われるマルクスが、『ユダヤ人問題』まで書いて関心を表わしながら、ユダヤ民族の殆ど実地的な生活・生存根拠であった市場を断罪し、ために、そればかりの理由でないかも知れないが、例えば社会主義ソ連で、表向きとは裏腹に、陰に陽に差別・迫害の対象であり続けた。マルクス教が健在であるかぎり、ユダヤ民族と社会主義ソ連（及び同類諸国）でのしつくりした共存は考えられない。私などは、ユダヤ民族が（持ちようもなかった独自の「国家権力」と殆ど全く無縁なところの芸術、科学、哲学、等々で）達成した数多く人類の貢献に脱帽し、敬意を抱いている。（しかしイスラエル建国はいいとして、パレスチナ問題への対処の仕方には納得しかねる。）

市場（経済）についてのマルクスの誤解は全く取り返しようもない罪作りであった。社会主義悪の根源であるさえ私には思える。市場（経済）の限界についての指摘ならまだしも、マルクス思想は市場（経済）の全否定である。これについては、私は既に「人間と交換」（本誌、第33号、'84）論じているので、あらためて詳しくは触れないでおこう。

そのマルクスの故に、特に権力を掌握したマルクス教社会主義者は市場を口にすることさえ憚り、市場（経済）に係る一切の社会（文化・経済・法律等々）的の制度や習慣、施設・設備・基盤を廃止することに専念した。同時に、当然のことながら、馬鹿げたことに、市場（経済）に係る用語を追放するか、別の言葉に置き換えるかした。しかし、どうしても廃止・追放し切れないものが、いずれは死滅するのだという口実で、幾つか存続し使用され続けた。ただし、私たちに馴染みのものとは内容を変えられてである。

皮肉なことに、一時「労働証券」と呼ばれたことがあるようだが、「貨幣」がその代表的なもの。「皮肉なこと」と言ったのは、マルクスが「貨幣」に「物神崇拜」象徴の意味を与えたにも拘らず、実物も言葉も一緒に追放出来なかったからである。

物神崇拜論は、マルクスが拝金主義を忌み嫌った余りに排金主義に走ったためか、あるいは（早速次元が低いと非難されるかも知れないのを承知で敢えて言えば）貧乏生活からの貨幣憎しコンプレックスの所為か。

こう思うには理由がある。貧乏すれば、貧乏の原因はこの世にカネがあるからだ、とつい思いたくなり、「この世からカネが消えたらさぞかしさっぱりするだろうなあ」と願望し



たくもなろうではないか。私の貧乏体験である。

更に、私の故郷に伝わり、母から聞いた吉四六（きちよむ、きつちよむ）話がある。

「こげえ（こんなに）おじい（怖い）もんは外にはねえ（ない）」と、わざと美人娘に化けた狐に語り、娘が一番嫌いだと漏らした犬をけしかけていじめた復讐に、小判を部屋に投げ込まれて、「ああおじい、ああおじい。助けちおくれ。わしが悪かった。もう堪えちおくれ」と部屋中をのた打ち回る。後に同じパターンの落語「饅頭怖い」を知ってびっくりした。

私は、この民話に、カネについての、特に貨幣経済が浸透して来始めた農山村百姓のアンビバレントな感情の揺らぎを見る。ゼニ（貨幣）は怖いものでもあり、欲しいものでもある。遠ざけたくもあり、引き寄せたくもある。有っても困り、無くても困る。どうしたらいいのだ!?

マルクスは「有っては困る」方を選んだ。しかし、ロンドンのマルクスはすぐには「貨幣の無い国（国家も無い、どこにも無い所 NOWHERE、つまりユートピア）」には移り住めないで、悔しいけれども憎い貨幣の厄介にならざるを得ず、二代目ブルジョアでもある二者一体的な親友エンゲルスの援助に頼る。

ゼニ・カネが有っては困るのと、無くては困るのとの困り方の間に差はないのだろうか。あるようでもあるし、ないようでもある。

例えば、以前、アフリカはサバンナの民ブッシュマンの、幾分こしらえ物と思える映画を観たことがあるが、そこでは、私たちに馴染みの貨幣ことゼニ・カネは、空から降って来た（飛行機上のアベックが放り捨てた）コーラの空き瓶同様、有っては迷惑かも知れない。主人公は、迷惑をもたらすこすすれ一向に役立たない瓶を、危険を冒しながら、はるばる彼らにとっての地の果てに捨てに行った。尤も、人間のいる所、どこでも、交換行為はそれなりに（時間を限定された観察者には直に見えなくとも、観察者が「受容れ」られたこと自体で）有ると、私は考える。もちろん、私たちの生活からある日突然カネが消えたら、結果は改めて言うまでもなからう。

ケースバイケースの余地を残して一般的に言えば、やはり無くては困る困り方の方が、人間にとっての災厄が甚大であることは間違いのない事実である。理由は簡単、人間は交換なしには存在できない動物であり、カネこと貨幣は、種々の態様を採りながらも、終始一貫人間に同伴するからである。総じて社会主義が今困り果てているのは、有っては困る方を選んでしまったことに基づき、180度転換がままならぬからに外ならない。転換には随分時間がかかるであろう。

マルクスを弁護すれば、彼は貨幣を言語に譬えたことがある。人間から言語を抜き去れるか？ 惜しむらくは、マルクスはこの簡単な一事を想到しないまま行き過ぎてしまった。あるいは、拘ると言語同様貨幣も人間に必要な不可欠だと言わざるを得なくなるのを察知して、本能的に忌避したのか。

言語に関して言えば、それがどんなに悪用されても、いまだかつて、言語無用論、言語廃止論、無言語社会論を説く人は現われなかった。それは、無理だろう。むしろ、一般には、必ずしも正確とは言えない「人間は言葉を持つ動物である」という定義が定着している。

あのスターリンでさえ、言語について教説（『言語学にかんするマルクス主義』）を述べ

たが、言語の無用を宣告したりはしなかった。本心は、自分以外は聞く耳さえあれば善く、口は無用だと言いたかったのかも知れない。事実、徹底的言論弾圧で「人民」に沈黙を強い、「党」つまり自分の主張・宣伝を一方的に聞かせた。

いささか貨幣に拘ったが、一事が万事、社会主義経済は制度的、言語的によれて行く。

田中雄三氏は、前掲「社会主義経済と市場性」で、昨年ソ連が施行した「国有企業法」に関して言及する中で、「国家発注」とは「変な用語」だと言い、ソ連の学者に質したら賛成したと述べているが（同書、59頁）、「変な用語」の使用は何も今に目新しいことではないし、もっと経済の基本用語で見られるのに言及しないのは不自然である。

もっと理解に苦しむのは、岡田裕之氏が「商品、貨幣、労賃という最も基礎的な社会主義のカテゴリー」（同書、34頁）と、さりげなく言っているのける神経である。

資本を「ファンド」、利潤（率）を「収益（率）」と言い換えて「搾取」を根絶したと言いつけていたのを知らぬはずはあるまいに。いつの間にか消えたが、貨幣も、有っては困るので、それに「労働証券」という言葉を当てた。

言葉を無くしたら実体も消えるという訳だ。便利な忍術である。私も、幼い頃、猿飛佐助や霧隠才蔵にどんなに憧れたことか。忍術を信じて奮進する列車の前に立ちはだかり、忍者に成り切った思いで胸の前に指を組んで立て、習い覚えた呪文を唱えて列車を止めんとし、哀れ砕け散った少年もあったとかや。

閑話休題。

こういう奇妙奇天烈に、日本マルクス教経済学者にして疑義を表明したり、抗議（？）の声を挙げた例を私は知らない。私は23年も前、「企業と利潤」（鹿児島県立短大商経学会「経済論叢」、第14号、'65、107頁）でその可笑しさを指摘したことがある。

マルクス以来、社会主義者は「解放（という言葉）」を好む。しかし、「開放（という言葉）」を嫌った。これは「計画」を好み、「市場」を嫌ったのと照応している。その理由の根源を探ると、マルクスの「交換」誤解に発する「貨幣」誤解に行き当たる。これが「市場」誤解、「商品・商人・商業」誤解、「私有財産」誤解、「分業」誤解、「利子」誤解、「地代」誤解等々の壮大な資本主義誤解体系に繋る。

他の項目と組み合わせると、マルクスの交換誤解が、いかに中世的・封建主義的メンタリティに共通しているかが分かる。一番分かり易いのは、商人・商業についての否定的心情である。

マルクスの場合、例えば「商業（労働）は価値を、したがって剰余価値を生産しない」という点に端的に現われている。マルクスはこれによって労働価値説に自ら一つの例外を設け、ジレンマに陥らざるを得なくなる。しかし、最後まで、彼はそれを自覚することがなかった。自覚したら後が続かないばかりか、全体のパラダイムが崩れ落ちたであろう。

マルクスが陥ったジレンマはまだ理論の枠内であって、現実経済に影響されることではなかったのだから、自覚を強いられずに済んだからであろうか。尤も、私にもよく分かるのだが、いったん理論の枠組が決まって出発したら、それが先入観に基づいていれば尚のこと、軌道修正は困難であり、進捗状況にもよるが出直しはまず不可能と言っている。

恐らく今日でさえ、マルクスに逆らえず、例えばますますシェアを高めているサービス（労働、産業）の取り扱いに無用の苦労を強いられている。サービス産業・労働が60%も占める程になった経済で、その分野の所得は他の40%分野の産業・労働に由来するなど、

正気で言えるものかどうか。

労働価値説はこの一点で破産しているのは明瞭であるにも拘らず、先の岡田氏は、別の箇所では留保をつけていながらも、社会主義の経済原論は「労働価値説に立って展開する立場が可能だし、また意味があるのではないか」(40頁)と臆することなく言う。商人は、例えば日本の「士、農、工、商」という公式的な身分別けに端的に示されているように、封建主義的社会では身分的に最下層に位置づけられて貶め卑しめられ、賤民扱いされるのが常態であった。何故なのか。いろんな要因が複合していよう。

思い付くのを挙げると、マルクスに倣って「交換は共同体際で起こった」とすれば、商人は異邦人まがい、あるいはもどきとして忌避され続けて来たのだろうということである。つまり、「身内の者」扱い出来ないということである。

商人は、外部世界の情報をもたらすけれども、内部世界の情報を持ち出す。前の機能は重宝だが、後の機能は迷惑である(ソ連のKGB機能を想起せよ)。封建主義的社会では、通常後の機能の方が支配者によってより重視されたに違いない。諸藩の公儀隠密に対する警戒が想起される。

更に、自給自足率が高く、またそれを安全保障として追及する当時の支配者にとって日常的・直接的に不可欠なのは農・工生産者であった。そして、農・工庶民にとっては、汗水垂らすことなく口説で「無法な」利を稼ぐ商人というイメージが、妬みもあって定着したことは難しい想像ではない。実際に「詐欺・瞞着」によって手酷い目に遭った事例も決して少なくなかったろう。

内村剛介氏によると、「ソ連にビジネスという言葉はない」(NEXT, '87・11)。「いわゆる商売人に当たるロシア語は7, 8語あると思うが、それらはいずれも蔑称である。……ロシア語で『取引する』は『ごまかす』と同義」「商売人はモラル上、風上におけない連中、社会的には下々のろくでもないやから、と帝政ロシア時代からみられてきた」(185頁)。

だからと言って、商人を根絶出来ないのも痛い事実であった。支配者は権威を殊更表現する異域の珍品をもって身辺を飾る必要があった(ブレジネフは外車〈資本主義国車〉の資本主義商人からのプレゼントを喜び、広く社会主義諸国は共通に犬並み一般庶民立ち入り禁止外貨「商店」を設けて、支配階級の外国〈資本主義国〉高級製品入手に便宜を図った)し、庶民は生活必要資財を外に、したがって商人に頼らざるを得ないことが、時折にはあっても起こる(現代社会主義国の庶民レベルでは表向き殆ど無縁)。

こうした社会体制の中で、商業・商人の社会的役割の重要性を自覚し、石門心学の名の商人道確立を提唱・普及した日本の石田梅岩(1685~1744)は出色の先覚者であった。社会改革を主張した訳ではないが、商業の社会的認知確立に貢献した功績は評価してし過ぎることはない。日本の商家に伝えられた家訓類には彼の影響が反映している。徳川封建体制下で、凹凸はあっても、広く商品・貨幣経済が浸透していたことが、近代化にどれだけ役立ったことか。このためには、商人の社会的役割・地位が正當に評価される必要があった。

社会主義諸国では、最近の一部現象は措いて、一様に庶民レベルの日常商業的サービス欠如が動かし難くがっしり根を張って定着しており、極く普通レベルの食料品などさえた生活必需品を手に入れるための行列は、貨幣の形では現われないが、家計に大きく負担をかける必要経費支出である。「指導者」と自らを呼ぶ支配階級は、行列の苦行を免れてちっとも痛みを感じなくて済んでいるが、行列がいかに巨大な社会的浪費であるかを認識出来

ない知的状況は、マルクス教阿片中毒症状としか言いようがない。

私は御免だが、日本マルクス教徒は社会主義代表国ソ連に行って、一つ行列を体験したかどうか。それでも帰国して尚社会主義礼賛を唱える情熱が残っていれば、脱帽、深く頭を垂れるのみ。

ただし、御招待訪問は駄目。第一それでは行列に参加出来るどころか、近付くことさえさせてもらえず、ひょっとしたら、時間・場所が慎重に選ばれ、見ることも出来ないかも知れない。

それにつけても、記憶に残るのは、テレビのドキュメンタリー番組で市場の風景にカメラを向けた日本人取材記者の前に立ち塞がり、撮影を妨害しにかかった売り場で働く小母さんの激しい剣幕であった。

極く普通の庶民にしてこうである。情報忌避はもう本能化している。ひょっとしたら遺伝的形質となっているかと思える程である。この一場面でペレストロイカの至難が占えると言ったら単純過ぎるだろうか。

行列とはじかに関係ないが、さるテレビ局が放送衛星を使って同時中継した日・ソ女性対話にしても、まことに奇妙であった。ソ連女性の衣装は日本女性に比べて、みんながみんなはるかに高価・良質に見えた。日本女性の一人が、これはおかしいと思ったのであろう、「皆さんとても素敵なお洋服を召していらっしゃるが、どこでも買えるのですか」と尋ねた。この質問に意表を突かれたらしく、「ええ、まあ……そうよ。デパートなんかで……」と口ごもりながら弱々しげに一人が答えた。そうではあるまい。

デパート（国営百貨店）と言えば日本のそれを思い浮かべようが、まるっ切り違う。デパート自体滅多にない上、商品は量・質とも貧弱である。ノーメンクラトゥーラ（及びその家族）が先ずそこでショッピングすることはない。

だから、外国から買って帰ったか、「外貨商店」で買ったかのいずれかであろう。それなら、出席者は行列免除のノーメンクラトゥーラ夫人・娘たちということになる。そうでなければ、その場限りの舞台衣装であろう。

こんなことを言うのは、「ポチョムキン村」を思い出すからである。ルーズベルト（大統領）夫人もそれにころりやられた。行く先々が（もちろんスケジュールは十分余裕をもって決まっている）本物そっくりに偽造され、眼前に「天国ソ連」が疑いもなく「現存」していた。さすが演劇の国である。ロシア・ソ連演劇に憧れる日本の演劇人にしても、ポチョムキン村設営の役目を課されることはあるまい。

資本主義国の商人は、売手市場・買手市場で差はあるが、一般的に「消費者主権」で「お客様は神様」だが、社会主義国の小売商人、いや国営「商店」消費財販売係公務員は「売手が王様」（袴田茂樹『深層の社会主義』筑摩書房、'87、237頁）（したがって「買手は従僕」）の原則に忠実であり、「売ってやる」がモットーで、買手をないがしろにするのが板に付いている。サービス観念ゼロ、売れない方が仕事が楽で、その故に給料が減る訳でもない。いわんや彼らが「商人」たる自覚を迫られることもない。立場を替えれば買手に転じ、行列と無愛想・つつけんどんに出合うだろうに。いやはや。

ソ連社会の隙間を埋める闇「商人」にしてもそうだが、商人イコール悪人意識がマルクスによって強められたけれども、それを差し引いても、商人についての意識で今日のソ連は伝統ロシアの気風に直結している。内村剛介氏は先の引用に続けて言う。

「社会主義政権になってからも、商業、商人を蔑視する伝統は変化しなかった。マルクスの理論にのっとっての革命だから、市場経済を「諸悪の根源」とみる」(同, 185頁)。

商業・金融こそ命の綱であるはずのユダヤ人マルクスは、よっぽど商業・商人コンプレックスに取り憑かれる深刻な体験を幼い頃持ったのだらうか。どうも彼はユダヤ人の生存根拠を徹底的に破壊したかったらしい。しかし、ユダヤ人救済の脱出路を用意していたとも思われぬ。近親憎悪感を抱く程突然変異的の成り上がり出世を遂げた訳でもない。

生涯の労作『資本論』初版は、大部分埃を被って店頭に晒されていた。それが、彼の死後幾千万、否幾億冊捌けたことだろう。私も、貧乏しながら、ドイツ語版に日本語訳3種を取り揃えた。

しかし、皮肉なことに、マルクスは全く売上代金を手にしていない。教祖マルクスは貧窮に沈み、彼と血縁・地縁・人縁途絶のマルクス教徒は生活の糧を得て徒食する。私もまた。ひたすらマルクス教徒がしぶとく生き残るのを祈る。残念にも、遠回りながらマルクスあってのわが人生、否わが生活だ。マルクス寄生者に寄生する居心地は疼きのみ。結局、マルクスは悪の理論と善の功徳を後輩に残したという訳である。

さて、商人と一口で言っても、その在り様は一筋縄に行かない。数え立てること不可能な程の市場種類毎に見合った商人がいる。1, 2の例外を除き、いづこの社会主義国も、市場(経済)、市場(経済)へと草木の如くなびく。あるいは、季節が来た渡り鳥の如く、市場(経済)へ飛び立んとする。しかし、いかんせん、市場(経済)という劇場の舞台、大道具、小道具、衣装等はもちろんのこと、商人に一括される各種類のスタッフ、キャストが揃わないのだ。

もちろん、各国の事情は一様でない。だが、こと商人については一番好条件を備えていると思える中国でさえ、開放化進展の最中、商人不足にはたと突き当たった。

「中国貿易改革に壁 外国企業とトラブル増加」とは日本経済新聞(’88・10・13)の記事である。特に新たに貿易権を得た企業と外国商社などとの契約をめぐるトラブルが増加した。資金・人材などの条件が整わず、国際取引の経験不足から納期無視、契約不履行、品質面でのクレーム等々。

他の諸国は推して知るべし。しかし、これは重要な問題なので、くどいようだがソ連に代表例を見よう。

ソ連で、国有企業法の下、企業に独立性が大幅に与えられても、何をどうしていいのかさっぱり分からないので、相変わらず「国家発注」に殆ど頼っている。親の羽根にくるまれ過ぎて、巣立ちが出来ないのだ。親子ともども子離れ・親離れの体験・知識・学習が皆無であるのだから。

小川和男氏が「ソ連 ペレストロイカでも経済改革は遠い道」(THIS IS, ’88・10)で語っている。

「革命以来、外国貿易省が独占的に輸出入を取り扱ってきた制度を急に改編して、生産企業に直接貿易権を与えてみたものの、当の生産企業には外国との取引の経験が全くないわけであり、円滑な輸出入取引が行なわれるはずもなく、当然ながら混乱が起こっているわけである。生産企業には貿易実務のできるスタッフは居らず、ドキュメントも作れず、もちろん西側へ行ったこともないわけである。こうした企業が貿易実務に習熟するまでには、数年間が必要であるとみられる」(210頁、傍点は友岡)。

国有企業法は88年1月より施行されているが、「実際には企業の生産高の90～100%を国家発注に依存している状況である」（212頁）。

「アバルキン博士は、軽工業部門でさえ100%……国家発注に頼る企業があり、……今後2年間に国家発注の割合を70～80%に引き下げる企図を表明した。……しかし、こうした市場機能の導入は、企業や労働者における知識が何よりも欠如しており、容易な業ではない」（212頁、傍点は友岡）。

数年間で果たして可能か、私は心許ない気がする。

### 【3】 市場（経済）対戦場（経済）

戦争は、始めるのより終らせるのが一層難しいと、私は先に言った。思えば、社会主義「革命」とは、自ら言うように「階級闘争」という名の戦争である。

これまたマルクスが『共産党宣言』でこれまでの「人類史」を粗雑にも「階級闘争」で括ったのが災いの源であろうか。それが何時終るのか、先は一向に見えない。

マルクスは共産主義で終ると言った。だが、過去の共産主義、つまり「無階級」の「原始共産制社会」が、氷河期の洞窟奥深くに呑み込まれて見えないのと同様に、未来のやはり「無階級」の共産主義もまた、銀河系の涯にガス状になって拡散して見えないのだ。それでも、マルクス教徒は「マルクスには見えたのだから無いはずはない」と言い張って止むところがなかった。鰯の頭も何とやら。

何しろマルクスの御託宣では、どうも階級闘争は銀河の涯まで行かなければ「終戦」を迎えられそうもないのだから、やっと何人かの選び抜かれた宇宙飛行士が、太陽系の更にその縮小版たる地球近距離周辺軌道を周遊したに過ぎない今、全人類がノアの箱舟式に乗合せてそこまで辿り着けるのは（それが可能になるとして）、恐らく宇宙年齢（150億年？）に等しい先のことだろう。それまで、今の今の誰が生きていられるのか？

世界人口の5分の1、11億人になんなんとする人口を抱えた中国で「高度な社会主義実現に数百年」かかる見込みだと、中国「光明日報」紙が論じた。（日本経済新聞、'87・8・27）。どうして計測出来たのだろうか。記事は、これに「理想的民主主義をを求める声を『時期尚早』として説得する狙いもあるとみられる」とコメントしている。表の「短期的」動機はそうだろうが、裏に、『高度な（段階の）社会主義』なんてのを夢見るのは好きずきですが、実物を見るのはそれこそ夢のまた夢、そんな夢を見るより今の『初級段階の社会主義』に模様替えした方がお得ですよ」という主張を、密かに潜ませていると言うのは穿ち過ぎていようか。

清成忠男氏は、「中国の言う社会主義の初級段階とは、……社会主義の中に資本主義の初期段階を創出することにほかならないといえよう」（日本経済新聞、経済教室、'87・11・19、傍点は友岡）と読み取っている。

この時点で、あのソ連でさえ「3割が『共産主義信じぬ』（毎日新聞、'87・9・26）のだ。週刊誌「ソベセードニク」最新号の87年1月実施世論調査紹介による。あに中国ならんや。

「天の時、地の利、人の和」の観点から社会主義大国ソ連と中国を比べると、いずれも大いに対照的であることに気付く。

先ず【天の時】——これは社会主義の歴史的・時間差である。ソ連にはもう「市場経済」体験者は皆無と言って過言ではあるまい。国民的観念から資本主義は脱落してしまってい

る。外国に出る特権的機會を持つ僅かな人種は、資本主義の上澄みを平気で享受して楽しむが、もちろんそれは自国が社会主義であつたればこそである。国家計画委員会付属経済研究所コスタコフ所長さえ「市場を認めると社会主義でなくなる、という教育を私たちは受けてきました」（朝日新聞、'87・12・9、「いま社会主義は 第二部ゴルバチョフ改革〈15〉」）、「市場の復権 国民が望むものの増産に乗り出す」、傍点は友岡）と言う。中国のことは改めて言うまでもあるまいが、「ソ連は市民社会の伝統あるハンガリーや商業社会の伝統のある中国とは違っている」（O・C・ヴィハンスキー、袴田茂樹《徹底討論》「ソ連経済改革の可能性を探る カギ握る『自立的』システムの構築」エコノミスト、'88・3・29）とのO・C・ヴィハンスキー発言に示されている（17頁）。

次は【地の利】——ソ連が資本主義国に接しているのは、ほんの僅かにフィンランドのみである。東方日本との隣意識は問題にならない。他方、中国には事ある毎に唱える「中国は一つ」の「一つ中国」内に「台湾中国」が現存し、潜在的に中国であり続けた（そして、間もなく帰って来ることが確実の）香港があり、資本主義国日本を絶えず意識し続けねばならぬ歴史的因縁がある。特に東南アジアにおいて商人的実力を蓄えた華僑との縁は切れることがなかった。これらは、庶民レベルのことである。

最後に【人の和】——率直に言って、ペレストロイカにとってマイナスの意味でソ連の人心は社会主義に馴染み過ぎて凝結している。これまでは、これが支配者に都合だった。支配階級には、先にも指摘したように、社会主義こそが資本主義成果を最高水準で享受出来る砦である。一般庶民は庶民で、何しろ行列のない社会などこの世にあるなど思いも寄らないのだから、昔に比べりゃあまだ増した、社会主義様々だの思い込みに固まっている。閥屋たちには、社会主義に寄生するからこそ法外な「特別剰余価値・利潤」にあり付けるのだから、これまた「社会主義は命の恩人」である。見事、社会主義一色に染まり、それぞれの立場で社会主義万歳に心底から唱和する。比べて、中国社会主义の網はもともと粗大であり、それさえあの「文化大革命」のお蔭でずたずたに切り裂かれ、ブラウン運動的渾沌、無政府の乱雑の状況で、今にも分解せんばかりである。

何時果てるとも分からぬ内部化された（革命）戦争状態で市場経済は、特にソ連の場合、徹底的に破壊された。ゴルバチョフ書記長は、それを知ってか知らずにか、レーニンに帰れと言ひ、あのネップこそ真の社会主義であつたかの如く評価する。だが、私はその考え方には懐疑的ならざるをえない。

私の解釈はこうである。

- レーニンのネップは革命（という名の）戦争疲れからの一時的休戦であり、消耗した兵站基地再建の時間稼ぎであり、主として軍糧確保が直接の目的であつた。
- ネップの専らの対象は農業・農民・農村であり、工業を含む全産業に及ぶものではなかった。クラークは復活したが、資本家が復活したわけではないし、レーニンがそれを目指したとは到底考えられない。
- ネップがそれなりに実施・成功したのは、その時期が「十月革命」の僅か数年後、ネップに必要な人的・物的条件が尚残されていたからである。そしてこれがゴルバチョフ書記長が実施しようとする「新ネップ」に最大の難問をもたらす点である。

レーニンを継いだスターリンは、頃好しと、農業・農民・農村の集団化を徹底的に・暴力的に・強制的に実施し、ある程度復活した市場経済の土壌をそれこそブルドーザーで剝

取ってしまった。以来、中国の社会主義年齢に優る年月が経過し、市場経済を記憶する人さえ絶滅してしまった。

僅かの知識人は、知識として市場経済の存在を知る。時には過大評価さえなされる。

例えば、L・ポプロフ経済学博士候補は『新世界』誌（'87, 第5号）に投稿して言う。袴田茂樹「ソ連人の見たゴルバチョフ改革——『ペレストロイカ』の実態と限界」（正論, '87, 33~34頁）に紹介されている要旨を引用する。

「①市場経済には長所（たとえば効率）と同時に短所（収入の大きな格差、失業など）があり、計画経済にも長所（たとえば生活の安定）とともに短所（不足経済、経済管理の悪さ）がある。……発展途上国でも、市場を受け入れた国は急速にわれわれに迫りついており、それを拒否した国は飢えている。社会主義国でも、市場を多く受け入れている国はより豊かだ。

②市場社会主義などというものは言葉のアヤに過ぎず、ばかげた考えだ。社会主義のあるところには市場やリベラルな精神の余地はなく、またあり得ない。計画経済のもとでは、価格法則がプラスに機能することはあり得ない。というのは、社会主義は市場と両立しないからだ。

③純粋市場経済の時代は過去のものになったという考えがある。私はむしろ西側世界は今その一歩を踏み出したばかりではないかと思っている。

④自由な企業活動は、長いあいだ封建時代の遺物や理想主義の活動によって窒息させられてきたが、まだ息は絶えていない。西側世界には大きな未来がある」（パラグラフ番号と傍点は友岡）。

要旨ということだから、細かく詮索するのは遠慮すべきだろうが、気になることは述べたが良からう。

- 主張の基本的論点は、②の「市場社会主義……は言葉のアヤ」、「社会主義は市場と両立しない」に端的に示されている。ただ、これが①で「社会主義国でも、市場を多く受け入れている国はより豊か」だと言明したあとだけに、ちょっと気になる。それはどの国か？ 国次第では問題が起るが、ここでは立ち入りようがない。

「言葉のアヤ」どころか、私は「インチキ、ゴマカシ、デタラメ」だと思う。だから、ズバリ「社会主義は市場と両立しない」に賛成する。

このことは、後で触れるのだが、「市民社会と社会主義」が実は「市民（社会と）社会主義」であり、「市場（経済と）社会主義」の「市場社会主義」にそっくり対応する。「市民」と「市場」は同系の言葉である。

- ③④の論旨の流れは、私がこれまで折りに触れて述べて来た見解に沿うものである。（もちろん彼女の預かり知らないことだが。）ただ、コメントしたいのは、「純粋市場経済」がどう定義されているのか、それ次第で「西側世界は今その一歩を踏み出したばかり」が言い過ぎになろう点である。④で言う「理想主義の活動」とは具体的に何を指すのか不明だが、例えば、イギリスの労働党に代表される資本主義国内「社会主義」的政策（要求もしくは実施）を想起していいだろうか。
- ①の市場経済と計画経済の長所・短所比較に一番問題がある。主旨は分からぬではないが、あたかも、両経済の長短所を取捨選択すれば、品種改良的に理想の経済が得られるかの如き論述である。②でその心配は消えたが、私は、ふと、次のエピソード



を思い出したものだ。

ある美形の映画女優が、バーナード・ショー（だったか）に、語りかけた。「貴方と私がもし結婚したら、貴方の素晴らしい知能と私の美しい（と言ったかどうか）体を備えた子供が生れるでしょうね」ショーは、これをおもむろに受け流した。「いやいや、貴女のお弱いおつむと私の貧弱な体を受け継いだ子供でしょうね」

それはいいとして、両経済長短所例示には大いに問題がある。手短かに指摘する。

◆ 市場経済の長所例「効率」はいいとして、短所例「収入大格差、失業」は社会主義者の宣伝にそのまま乗っている。

◆ 収入大格差つまり貧富差は、「前」資本主義と「後（と言われる）」資本主義（つまり、社会主義）程顕著である。

資本主義は、福祉政策に依るところ大であるが、それとは別に、市場原理自体に収入平準化力を内蔵している。上への突出的例外例はあるが、下方硬直的システムも導入され、総体的に日本の貧富差は最小であると言っていい。

社会主義については、社会主義国に普遍的な支配階級の（各クラス別）特権・王侯のお手盛り待遇を指摘するだけで十分であろう。それは、資本主義国富裕層水準に優るとも劣らない。

◆ 「失業」の有無、そう、その点が計画経済のセールスポイントであった。長所例「生活安定」が直結する。だが、今、まさにそのことで社会主義は難局を迎え、困惑極まりないのだ。ゴルバチョフ書記長自身『ペレストロイカ』で、「乱費型経済」を嘆く（田中直毅訳、講談社、'87・11、59頁）。失業を企業内に閉じ込め、無失業社会の体裁を繕い続けたツケが一挙に重くのしかかって来た。失業を隠しおおせなくなったのだ。

他方、資本主義の失業は、原理的には就業・職業選択自由の代償である。離婚が結婚の自由の代償である如く（私の「福祉を市場に探る」本誌、'76、第25号、10頁以下参照）。

要するに、市場経済の「短所」（例）さえ計画経済の「長所」（例）に勝るといふことである。もともと両者は、対等に並べて比較し、甲乙論じられるようなものではない。いずれはつきりする。

いよいよ中心的課題に直面したようだ。つまり、社会主義諸国が先を争って取り入れようとする市場経済は、果たして期待に応える働きをするだろうか？ 結論を先に出せば、社会主義国が社会主義の看板を降ろさない限り、先ず絶望的であること、そして社会主義を今更捨てられそうにないから、叶わぬ夢であること、以上である。

彼らが思っているほど、市場（経済）システムはどこにも簡単に持ち運べるワンセットのポータブル装置ではない。

一般に破壊は一瞬・簡単・容易だが建設は長期・複雑・困難である。適切・周到・綿密な設計図もないまま、行き当たりばったりに騎虎の勢いで「革命」という名の破壊を敢行したものの、正義の興奮はそう長続きするものではない。叱咤激励の連続、「欲しがりません勝つまでは」精神の絶え間ない注入、よくぞ70年も戦場暮しが出来たものだ。

そう、社会主義「革命」とは、市場（経済）を（破壊・整地し）戦場（経済）に変換（して建設）することだったのだ。前出のO・C・ヴィハンスキー氏の発言のなかに「戦時共産主義」は「以来、わが国の慢性病」（同上、15頁）とある。

思い出す。中学校1年時、「どうだ」が「ろうら」と聞こえることからローラの渾名を持

つ物理の先生が、ある日こう宣うた。「教室（古くは教場）は戦場らろ（だぞ）、鉛筆は鉄砲らろ、消しゴムは弾丸らろ、云々」

その市場だが、無に有を生み出すのと同じで、戦場を「建設」する程しかく単純・明快・容易ではない。何しろ、人間の歴史と同じ歳月を経て、紆余曲折ありながら今日の市場は熟成されたのであるから。その構成要素の生誕には歴史的時間差がある。だが、ちょうど年齢差のメンバーで社会が成り立つように、それぞれの領域を独自に持ちながら相互補い合って棲み分け、全体として共同・協同的に融合し、捉えどころのない巨大な軟体・群体生物として市場は現存する。それを構成する人的・物的要素、器官、システム等々、数え挙げるには百科事典的スペースが要るだろう。ここでは、乏しい知識を晒して、大项目的なものを思い付くまま乱雑にざっと列挙しておこう。

行商、夜店、朝市、屋台、定期市、常設市（日本風マーケット）、商店街、専門店、百貨店（デパート）、スーパー（マーケット）、コンビニエンスストア、チェーンストア、通信販売、宅配、レンタル・リース、予約；小売、卸売、問屋、仲買、両替商；古書・骨董市場、中古車市場、青果市場、花市場、植木市場、魚市場、家畜市場、労働市場；株式（有価証券取引）市場、外国為替市場、不動産市場；特許権・著作権・商標権等の保護に関する法律、民法・商法・経済法等、民事裁判、会計士、簿記・会計；小切手（当座預金）、為替、振替、証券、国債、社債、各種（生命・災害・自動車・旅行・医療等）保険；人材養成の商業系各種（段階）学校（簿記学校、商業高校、商・経営学部）、資格検定試験制度；運輸・通信・出版・保管施設（道路・鉄道・港湾・電話・郵便・倉庫・冷蔵庫設備）等々インフラストラクチャー；各種銀行、証券取引所、登記所；（各種メディアを通しての自由）広告・宣伝；契約、信用、利子、配当、地代、……。

それらの何が社会主義国に見出せるか。しかし、戦場の構成要素は全部揃っている。

陸・海・空・軍隊、武器（飛行機・戦車・軍艦・ミサイル・大砲・自動小銃）、弾薬、塹壕、飛行場、戦略・戦術、指揮・命令・服従、伝令、通信、戦線、兵站、輸送、徴発、スパイ、統制、配給、検閲、軍律、憲兵、幹部養成学校、各兵種学校、各段階司令部、兵舎連隊、師団、演習、徴兵、軍刑務所、……。

要するに、市場（経済）と戦場（経済）とは、原理的に相互排他的であり、同一空間に重なり合って存在出来ない。

もちろん、資本主義国にも、現実には戦場（経済）が存在するが、平時には、片隅に追いやられて遠慮勝ちであるのが普通である。しかし、戦場（経済）を統制（経済）と読み替えると、それは市場（経済）の基本的枠内に取り込まれ得る。種類と方法によっては、市場（経済）の短所と言われるいわゆる外部不経済の修正に役立ち、補完的役割を果たす

対して、社会主義は市場（経済）全面排除の更地に地上げ屋よろしく戦場（経済）、つまり指令・計画経済をべた一面に建設して来た。最終目標は、レーニンが自信をもって指示した「社会全体……一事務所・一工場」（『国家と革命』中央公論社、世界の名著、568頁）である。「統制は、真に普遍的・全般的・全人民的なものにな（り）……なんとしても逃れられないものとなり、『身のおき所なし』という状態になるだろう」（傍点は友岡）。

市場（経済）導入・再建可能性は、社会主義の歴史的経験の長さに累乗的に反比例して減少する。

社会主義の「祖国」を誇り、一国社会主義時代は資本主義国内共産党をコミンテルン・

コミンホルムを通じて指図し「祖国」に奉仕させ、社会主義圏時代になると他国を衛星視し、君臨して来た。その誇らかな歴史が、一転・反転・暗転、悔恨の歴史になった。

しかし、ゴルバチョフ書記長はスターリン以降直前までの歴史（の結果）を悔恨の思いで振り返り「全体としてソビエト社会は、ますます收拾がつかなくなっている」（前掲『ペレストロイカ』26頁）と率直な認めながらも、レーニンに改めて帰依することで「社会主義の原則を完全に復活させ（る）」（同、36頁）のだと説くのである。スターリン以降から離れられても、レーニンから、したがって「真の」社会主義からは離れられないし、離れるつもりは毛頭ないのである。そこに、特にソ連の悲劇性が凝結している。

再度強調しよう。市場（経済）は一朝一夕で即製され得るようなものでないし、譬え更地でも移植出来るようなものでは決してない。（いわんや、計画経済という名の戦時・戦場経済がびっしり敷き詰められている岩盤上においておや。）

先進市場（経済）国から、それなりの知識は得られよう。それを実用可能な体験的知識にまでに体内化するには、特にソ連の場合、少なくとも3歳の幼児の殆どを先進市場（経済）国に送り生活体験させることから始めねばなるまい。

「日本は出来たではないか」、こう反論する人があれば、「そう、日本は出来た。それは、社会主義類似の封建主義下でありながら、体制の中に市場（経済）が既に自生して根を張り、あるいは体制自体によって保護育成され、重層的に広く形成されていたからである」と答えよう。

これについては、芳賀徹氏の「文明としての徳川日本」（学士会報、'88-IV、No781）に大いに教えられる。拾い読みしよう。（傍点は友岡）

「『徳川の平和』維持の制度として興味深いのは、……幕藩体制といわれる国内支配の独特の制度です。……まことに見事な一種の安全保障の制度であった」（87頁）。

「諸藩が360幾つかある……地方分権の時代……。地方は地方なりに経済的にも独立し、文化的にもそれぞれの特徴を生み出し……。しかし、中央政府と絶えず関係なしには存立し得ない。そこに成り立った中央集権と地方分権の非常に賢いバランスの関係……250年の間、日本をそのネットワークによってすっぽりと支配し、これによって国内の安定と秩序が維持された。……そこに流通と活気をもたらすために参勤交代……」。

参勤交代によって地方の文化が中央に……。江戸や京都や大阪の文化・情報は大名行列によってまた地方に拡散され、国内に絶えず文化と情報の交流……。……大変な出費……はつまりその周辺に生きる民衆の潤い……経済の平等化を促（す）……最も活発なエンジン……」（88頁）。

「日本では……武士、町人、職人、農民と、その間には絶えず接触がある」（89頁）。

「諸藩の大名も、将軍も老中も、村の豪農も町の物産家も、殖産興業を唱えては日本国内の再開発を絶えず繰り返し……。それが技術の進歩……教育の普及を促す。商業活動も活発になる。しかも、国内の東西南北の交通はかなり安全であります」（89頁）。

また、封建制を軸に資本主義西欧・日本と社会主義中・ソとを比較する木村雅昭氏「中ソ改革路線の文明史的考察」（中央公論、'88・11）も非常に参考になる。

「今日の資本主義世界と社会主義世界は、それぞれ全く異質な歴史的過去を背負っている。すなわち社会主義ないし非資本主義的發展を辿った地域は、これまで帝国が興亡を重ねすぎた地域であり、同時にまた今日の社会主義体制も、過去の帝国経営と相似た特徴を

兼ね備えていた。例えば最高指導者の無謬性とその政治指導に対する絶対的服従、計画経済とそれを支える権力のトータルな性格、国家に負わされた聖なる使命とそこに発する膨張主義的な傾向——……。

それに対して資本主義的發展がなされた地域、つまり西欧、さらには日本、……国際的にも、より分権的で、多元的な世界にほかならない。そして国制史のレベルに注目しても、そこは封建制が花開いた地域であり、さらに封建制以後、絶体主義（ないしそれに類似する体制）を経て、国民国家へと発展していった地域にほかならなかったのである」（149頁、傍点は友岡）。

芳賀氏がタイトルに「文明としての徳川」を選び、木村氏もまたタイトル中に「文明」なる語を用いていることに気付き、文明こと CIVILIZATION が都市こと CITY、市民こと CITIZEN に由来するだろうことを思った。

文明と文化の意味はあいまいで使い分けが難しいが、日本語習慣で、例えば「文化住宅」とは言い得ても「文明住宅」とは言い難い感じがするところから見ると、無意識には区別しているのだろうか。尤も、文化は明治初期の「文明開化」の省略語という見解もあったような気がする。文明に対して文化こと CULTURE が、農業こと AGRICULTURE に含まれて、耕作の意味を持つことも無視出来ないだろう。

対照性を強調すれば、「都市文明」に「農村文化」となろうか。

私の語感として、「農村文明」はあり得ないが、「都市文化」に違和感はない。カルチュア・センターの類が都市に多いのもその故か。尤も、いかにカタカナ文字、和製英語が好きな人でも、シヴィライゼーション・センターではね。

以上、あくまで一日本人の語感論である。

しかし、もし都市に文化・文明があり得るのに対して、農村に文化はあっても文明はなし、と言い得るならば、都市と農村との（中世期の、そして現代の資本主義と社会主義の）非対称的原理が浮き出されることになる。このことを記憶しておく、次に見る市民なる存在を理解するのに役立ちそうだ。

#### 【4】 市民はどこに？

「市民」という言葉が気軽に使われている。「市場（経済）」を「導入」しようと必死の社会主義諸国について語る場合でさえ、人々は無邪気にその言葉を使う。「導入しようとするのは、それが存在しないからである。「市場（経済）」が存在しない所に「市民」が存在出来るのか？

ある意味では出来るし、別の意味では出来ない。このことは、「市民社会」が、大抵「近代市民社会」というような言い方で、資本主義社会について用いられていることを想起すれば、大体見当がつくだろう。

「ある意味」とは、「市・町村」毎に「市民」・「町民」・「村民」という言葉が使われる意味である。同類項は、「区民」・「県民」・「都民」・「道民」・「州民」・「国民」である。つまり、行政単位地域別名称の一つである。だから、今日の諫早市の「市民」が明日飯盛町に移り住めば、明日から飯盛町の「町民」である。何ということはない。だから、モスクワ市に（モスクワ住民である）市民がおり、平壤市に（平壤住民である）市民がいて、ちっとも可笑しくない。

しかし、「市民社会」という言葉で使われる「市民」は、決してそういう意味ではなく、「別の意味」を持っているはずである。

「別の意味」の市民とは、「行政単位地域を超えて自由性を備えた住民」と、ここでは定義しておこう。この定義では、したがって、町民だろうと村民だろうと、州民だろうと国民だろうと、無差別に「市民」である。ただし、この定義は、幾分理想主義を引きずっているのを認めねばなるまい。「自由性」がそうだからである。つまり、今尚「望ましい」ことだとの思いを込めてその言葉を使うからである。

「自由性」と言ったが、自由にはいろんな見地から語られる諸側面がある。言論の自由、結社の自由、出版の自由、移動の自由、就業の自由、等々。私はここでは、「出入自在」に焦点を当てて、「市民」と「市場」とを論じようと思う。

何故かと言えば、現に今「市場」を論じたばかりだし、市場の一般性質が、その「出入自在」性で特徴付けられるし、それが市民との共通項であるからである。言い換えると、市場を論じて市民を論じないのは片手落ちになる。

もう結論は出ているようだが、それではあっさりし過ぎるので、今少し論じよう。結論とは、「市場（経済）のない所に市民はいない」ということである。

私たちにとっては、市場が出入自在なのは当然過ぎたことで、日頃格別意識することもない。当然のことを論じねばならぬとは、何とも悲しいのだが、今はそれに堪えよう。

出入自在は、もちろん、売手、買手の双方にとってである。市場とは、売手・買手が自由に出合って、商品・貨幣を交換する共通の広場・空間のことであり、市民は、売手または買手として、そこに自由に集まり＝入り行き、そこから自由に散り行く＝出て行く人々のことである。つまり、市民は「市（場の）民」である。

尤も、誰でも売手、買手になる得るが、両者間に条件上の違いはある。端的に言うと、「人は何を売ろうと勝手とは行かないが、売られている物は何でも買える」となる。

何でも無条件に売るわけに行かないのは自明なことだが、敢えて説明すれば、社会秩序に反して一般市民に迷惑になる物があるからである。差し当たり思い付くのは、銃砲、刀剣、麻薬、毒物、薬物、盗品等々。

それらは、品目毎に条件を異にすることがある。銃砲を売ることが出来る条件と、薬物を売ることが出来る条件とは等しくはないだろう。その一々を私は知らないし、ここでは知っておく必要もない。知っていることは、そういう品目の売りについては、売手に「資格」や、届け、認可・許可等の一定の硬軟・難易異なる法的手続・規制が必要条件付けられているということである。例えば、ふぐ料理には何々免許取得の調理師、散髪サービスには理髪師免許、個人タクシーには自動車何種免許に運転歴何年以上とか。数え立てれば、数限りなく出て来そうだ。医師、看護婦、薬剤師、公認会計士、計理士、学校教員、弁護士、ボイラーマン、ブルドーザー運転士、……。それこそ切りがない。

先にも述べたように、買手は売られている物は何でも買っていいが、殆ど無条件なのは小売段階であって、その前段階の公設市場の出入については、時間的・空間的制約の故に、それなりの資格が必要ながある。誰も異存があるまい。

要は、資格取得が万人に平等に（無差別に）開かれているかどうかの点である。

つまり、法が万人（国家や、支配者に忠実かどうかに関係なく）に対して平等かどうかである。そして、法が行政権力に左右されずに、きちっと制定され、執行されることを前

提にしている。

さて、周知のことだが、中世西欧には「都市の空気は自由にする」（つまり「都市……は自由」）という文句が広く通っていたという。（中世都市くそれも、北欧都市と南欧都市の違いを重ねて）と古代都市の違いについては、私の「都市と国家についての原理的一考察」本誌、第23号、'74を参照されたい。）これは、「農村の空気は不自由にする」（つまり「農村……は不自由」）を含意している。

さすれば、（自由）資本主義は都市（市民）原理に、（不自由）社会主義は農村（農民）原理に立つのであろうか。

顧みると、昭和初期以来日本マルクス主義者は「講座派」（共産党系統）と「労農派」（社会党系統）の二派に別れて、いわゆる「封建論争」に明け暮れた。戦後、時到来りと昂揚期を迎えて、マルクス主義を唯一無二の「科学」だと信じて疑うことのなかった若い私（たち）は、復活した論争の興奮に囚われることになった。復刻された文献を貪り読んだあの情熱よ！ 一炊の夢を見させて貰ったのを感謝すべきか。

論争の対象は、主として、農村・農民・農業である。農業生産額が今日的なGNPに占めるウェイトはともかく、制度的にまた構造的に、当時一般的であった高率・額小作料が経済外的強制によるものではあるか、経済的競争の結果であるか（資本主義定着の度合い）が日本革命の戦略を左右する焦点であると認識されていた。結論次第で、当面の敵は天皇制が独占資本家になり、前者であれば、革命対象は寄生地主制に乗る天皇制打倒のブルジョア革命が戦略目標になり、後者であれば独占資本打倒のプロレタリア革命が課題になる。

今になっては戯画でしかない。論争の種自体が消滅したのであった。

現実はそのような論争に煩らわされることなく進行し、彼らの手の届かない所で農地改革が遂行され、そして、「天皇制」は装いを変えて健在なまま、前代未聞の経済成長の結果、日本は彼らが味わった生活水準を遥かに超えて、彼らが（私もまた）夢想だにしなかったレベルに達し、彼らが憧憬して已む所のなかった社会主義諸国から逆に羨望されるまでに至った。今の若者たちには想像だに出来ない程（この今の社会主義諸国同様に）絶対的にも貧窮であった庶民の暮しを心痛の思いで回顧すると、出発点において彼らが人間の良心にいかにか忠実であったか、これは強調されねばならないであろう。

しかし、その後も、再び場所柄に似合わない喜劇的風景が後継者の思い込み人種によって展開される。場合によっては、時代・状況の変化を無視した自慰的満足追及としか思えない主張や行動が現れ、それを見る今の私は哀れを誘われ、つい涙ぐむ。

さて、都市住民は主として商工業者であり、農村の住民は主として農民である。もちろん、農村にも、工業的職人は専門的にまた兼業的に領主や農民の生産・消費の需要に応えるべくそれなりに存在する。量・質で足りない分を都市の職人に依存するのは当然であり、また都市商人の厄介にもなる。

中世期には、商人は、おおまかに言って、遠隔地間と近辺間のエリアを棲み分けて共存していたようだ。都市は食糧その他の資源を農村に頼り、農村は自給外の工業的製品や、奢侈品等を都市に頼り、相互補い合う。しかし、先に指摘した俚言的文句が示すように、都市住民は身分的制約から脱して、限定のない活動空間に生きており、農村住民は身分的制約を受けて限定された活動空間内に閉じ籠って生きているという非対称的存在様式は否定すべくもなく見分けられる。つまり、都市住民たる商人は城壁を出て農村どころか

か異境へ行けるのに、農村住民たる農民は行く手を城壁に阻まれ、いや、それ以前にそもそも生地<sup>1</sup>に緊縛され、都市に入れないのである。

それは、今日の資本主義国と社会主義国の間にも観察されるパターンである。ただし、中世期に都市と農村がいわば共存した程度に比べて、両者は非対称的になり過ぎている。

中世都市は自らの手で城壁を築いたけれども、それは農村貴族・領主等の暴力的侵入の防衛設備であって、決してその都市住民の外出（逃亡）阻止を目的としたものではなかった。現今の両主義間国境（城壁）は、ベルリンの壁が象徴するように、外からの入りを警戒するよりも、自国の住民の脱出阻止が主目的である。資本主義国住民は、先ず自国を出て社会主義国に入るのを自国権力に阻止されることはないが、実際に入れるかどうかは相手次第である。まさに、国境という名の城壁が行く手に立ちちはだかっている。他方、社会主義国住民は自国を出ようにも、自国権力によって阻止される。つまり、資本主義では移動が自由（出入自在）の故に全域が都市化しており、社会主義では国外は言うまでもなく国内ですら移動が不自由であり、国の全域が中世期的農村化している。

また、資本主義は生きるのに社会主義を必要とすることがないのに、社会主義は資本主義に依存することなしには生きられないという構造がある。皮肉なことに、全域農村的原理の社会主義で基本的食糧自給に余裕がなく、都市化農村を抱えての全域都市的原理の資本主義が全体として世界的食糧供給基地になっているのは、偶然のことであろうか。先端科学技術、資金、各種ノウハウ、等々流れは一方的であり、債権・債務のアンバランスが構造化している。観念的資本主義内社会主義者が二番煎じの国有化政策を実施したことはあっても悉く失敗したが、資本主義が全体の流れとして計画経済手法を「導入」しようとしたことはなかった。国有化政策の一時的実施を容認したのは、むしろ資本主義の懐の深さ広さを実証したのかも知れない。

そういう意味では、今日の社会主義は、中世期に農村が都市に対して維持していた程の重みさえ、資本主義に対して持ち得ていないことになる。中世都市は、何と言っても、食糧その他の資源を狭い城壁内で自給することは出来なかったし、自給の意思さえ持たなかった。

尤も、中世期の都市と農村の相互補い合い的關係は、近代に入ると解消する。もちろん、景観としての都市と農村は相変わらずであろう。問題は人間の存在原理である。

近代では農村住民も都市原理に立つ、すなわち身分に縛られない、ただ職業的に区別される「自由民」としての存在である。ブルジョア革命が、いわば農村の都市化、農民の市民化を節付け、都市と農村のいわば国境的城壁を取り払ったのである。僅かに残った中世都市城壁は観光資源的文化財になった。

ところが、社会主義圏では、その歴史的道程から反れて行き、都市的原理を農村に密閉して窒息させ、その空間を農村の原理一色に塗り固めた。

ところで、「市民社会と社会主義」の両立こそマルクスの理想であると主張し、理想から隔たった現存社会主義をそれなりに批判することでマルクス救出に努めている人のことを無視する訳に行かない。私に見えるのは平田晴明氏である。氏は、前掲、経済理論学会編『社会主義の理論と現実』で、マルクス主義がいかにフランスで再評価されているかを紹介して、マルクス主義が尚効用を持ち続けていることを証明しようとしているが、私は「罪なことをするなあ」という思いがこみ上げて来て仕方がない。かねてから、「市民社会主義」

論を展開することは知っていた。改めて繙き、驚き一杯であった。

氏の『市民社会と社会主義』（岩波書店、'80）中の「三 市民社会と社会主義」（初出は世界、68・2、これがそのまま著書の題名だから、核心と思える）中の更に同名の「III 市民社会と社会主義——社会主義とは何か——」（三重ねの入れ子？ つまり、「市民社会と社会主義」の中の「市民社会と社会主義」の中の「市民社会と社会主義」）は言う。キーワードは、マルクスが『資本論』中で僅かに使った「個体的所有」である。

（傍点は全て友岡）

「自由な人間の連合としての社会主義」（111頁）。

「社会主義社会における市民的権利は、資本家社会におけるそれに比べて、より公正でより人間的な権利であり、社会主義社会はこれを保証する……」（119頁）。

「市民的権利こそ、社会主義社会における個体的所有の法制的保証である」（119頁）。

「そこに形成される国家は、権利の体系が市民的である以上、同じく市民的国家である。……それは、レーニンが『国家と革命』において適切にも指摘したように、『ブルジョアジー（資本家）のいない市民的（ブルジョア）的国家』である」（120頁）。

もういいだろう。失礼だが、白昼夢のプログラムとしか言いようがない。

これは、どこの「社会主義」なのか。こんな都合のいい「社会主義」に平田氏自身出会った験しがあったのだろうか？ マルクス以後何年目にして？

これが書かれたのは（発表年月から甘く推定して）1967年暮。翌1968年（今を去ることちょうど20年前）、チェコスロバキアは「プラハの春」が無残にもソ連の戦車で蹂躪された。「千人宣言」に署名したと伝えられる、翌1969年東京オリンピック女子体操金メダリスト・チャスラフスカヤの胸中いかばかりであったろう。もちろん、その12年前の1956年に、ハンガリーはブダペストで芽生えんとする「市民社会」がソ連軍によって圧殺されていた。

当然、平田氏は、せめて「人間の顔をした社会主義」を遠慮勝ちに請い願ったチェコは知らなくとも、ナジ首相がソ連軍に一方的に逮捕・拉致され処刑されたハンガリーは知っていたはずである。それにも拘らず、チェコを知った後でも、この「七 市民社会と階級独裁 I チェコで提起された問題」でレーニンを弁護的に種々論ずることはしても、チェコはプラハの「一瞬の春」に殆ど言及しないのは何故なのだろうか。

ハンガリー（ブダペスト）、そしてチェコスロバキア（プラハ）の人々は命を懸けて平凡な「市民」であることを希求したのだった。ソ連とそれに追随する東欧共産党諸政権は、いずれにも「反革命」の烙印を勝手に捺した。結果は知っての通りである。

歴史は時としてまことに皮肉に展開する。ゴルバチョフ書記長は、限定付きながら（この限定が実は問題なのだが）「ペレストロイカは革命である」（前掲『ペレストロイカ』63頁以下）とさえ言う。何に対する革命なのか？

「プラハの春」をほんの一瞬の訪れにして再び暗い冬に逆戻りさせたソ連、そのソ連のゴルバチョフ書記長が19年後「革命」ペレストロイカを説きにプラハを訪れた。東の間の命だった「プラハの春」を悼む気持はあったのだろうか。「プラハの市民がこんな皮肉のひとつも言いたくなるのはもっともだ」（「冬ごもりしたままのフサーク政権を揺さぶったゴルバチョフのチェコ訪問」SCRAMBLE 中央公論、'87・6）。

『ゴルバチョフとドブチュクの違いは？』

『同じさ。ゴルバチョフが“グラスノスチ”（公開性）が何をもたらずかを知らない点



を除いてはね』

「プラハの春」を指導したそのドブチェク第一書記はソ連軍に拘引され、命だけは取り留めたが党から除名された。社会主義国では、死んだ人さえ「名誉回復」が容易でないのだから、生きた人のそれは先ず絶望的である一つの例がドブチェク氏の場合であろうか。

ゴルバチョフ書記長を迎えた後も、翌年1月4日付チェコ共産党機関紙「ルデ・プラボ」は「ドブチェク第一書記（当時）（が1968年に打ち出した政策）の名誉回復は絶対にできない」と強調しながら、「68年の“右翼日和見主義者と修正主義者”が目指した目標は、ソ連およびチェコの現在の改革と一致するという見方は全くのデタラメだ」と述べた（日本経済新聞、'88・1・6）。

その直後の6日、「ゴルバチョフ改革は“プラハの春”と同質」だと「チェコ自由派（元）高官」43人が声明を発表し、「当時の指導者に対する抑圧と差別」の中止を要求した（朝日新聞、'88・1・8）。

以来、故郷のプラチスラバでひっそり暮っていたドブチェク氏は、87年12月、イタリア共産党機関紙「ウニタ」のインタビューに20年間の沈黙を初めて破って答え、「ペレストロイカはプラハの春と“同根”」だと「称赞」（朝日新聞、'88・1・11）、「きわだった類似性」を指摘した（毎日新聞、'88・1・12）。

再び問おう。ペレストロイカは何に対する革命か？

答えはしかく簡単ではない。ゴルバチョフ書記長自身「これまでとは全くことなる新しい社会が実現するはずである」（前掲『ペレストロイカ』34頁）と言ったかと思うと、反転し、「社会主義から遠ざかるものではない」（45頁）と釘を刺す。

それでは、「革命」の原義は一体何だったのか？

ロシアに最初の社会主義をもたらした1917年のあの「十月革命」が「革命」の名に最も相応しいのであれば、それは「社会体制」（ロシアの場合、同じ年の2月誕生したばかりで「体制」化するには余りにも束の間で儚かった「ペテルブルグの春」のケレンスキー政権下の社会は、尚ツァーリズム・ロマノフ王朝体制が息の根を止められていたとはとても言えなかったもので、実態的にはこの体制）の変革であったからではなかったか。その象徴的出来事は、1918年7月最後の皇帝ニコライ2世とその家族の処刑であった。前例があった。フランス革命（1789年～1795年）はその末期に近い1793年、最後の国王ルイ16世は断頭台の露と消えた。マリー・アントワネットの可憐な命もギロチンで断たれた。

もちろん、支配者（及びその一族）の処刑を勧める訳ではない。今時そんなことは流行らない。しかし、革命が、最小限、社会体制の（善かれ悪しかれ）変革・転換で意味付けられていたのは否定出来ない。ペレストロイカにその条件が欠けているのは、先刻見た通りである。

そしてまた、「反革命」だと刻印して押し潰した国に出向いて、その「反革命」と「同質」「類似」「同根」だと評価されるペレストロイカという名の「革命」を迫るのだから、「革命」の原義は今や全く消滅してしまっており、**論理の矛盾と歴史の皮肉のみが残された**というわけである。

私に言わせれば、ペレストロイカが革命（成功？ それとも不成功？）であれば、同様にブダペスト、プラハ事件も（不成功に終わった）革命であり、かくして「十月革命」は名称とは全く逆の「十月反革命」である。あたかも、中国の「文化大革命」が「文化大反革

命」であったのと同様に。こういう言葉の乱雑な使用について、私は「経済学における政治言語」（本誌、第34号、'60・3）で論じた。参照して戴ければ、より真意が理解してもらえると思う。再び平田氏に戻ろう。

50回忌どころではない遠い昔に死んだマルクス、レーニンを弁護（祖先崇拜？）すること強くそして多ければ、生身の人間が悶え苦しむ。

平田氏がレーニンの『国家と革命』に「ブルジョアジー〔資本家〕のない市民的（ブルジョア）的国家」を見出して、何の注釈・コメントもなしに、さも意味ありげに引用するのに、「市民社会主義」論者の正体が露見しているように思えてならない。

何故か？

マルクス教徒は「矛盾」を好んで倦むところがない。しかし、仔細に点検すると、「現実の矛盾」は自分に都合が悪い限りであり、都合がいい「現実」に「矛盾」を見出すなど減相もないことである。精々、都合のいい「非敵対的矛盾」とやらをひねり出す。「論理の矛盾」は「矛盾の論理」という名の「言葉の矛盾」で平気にやり過す。マルクスによく見られる。私に言わせれば、論理として、そもそも唯物論（観念論と同様）と弁証法は両立・合体は不可能であるのに、「唯物（論）弁証法」「弁証法的唯物論」が教義的題目である。それを唱えると、この世に怖いものはない。

確かに、ブルジョアには、「資本家」ともかくとして、「富裕者」と「市民」という2つの意味があるように思われ、今日では、「富裕者」の意味の方が広く通っていることは間違いない。しかし「市民」こそ原義であり、しかも貴族に対する「平民」の意味さえあった。「富裕者」は派生的に使われるようになり、何時の間にか、多分日本マルクス教徒の頻繁な悪用の結果であろうが、母屋を乗っ取った感がある。試みにドイツ語辞書を引いて見るがいい。そんな意味は全く記載されていない。いわんや「資本家」においておや。資本家は、全く語源を異にする歴としたカピタリストなる言葉である。ブルジョアの語源は城、避難所を意味するブルクであり、ドイツにはその名を残す都市が多い。富裕者の意味が付加されたのは、推測するに、自治都市内で市の運営に当たるのが生活にゆとりのある富裕者に集中するようになり、あたかも市民を代表するうちに富裕者イコール市民と観念されるに至ったのであろう。こんなことを平田氏が知らぬとも思われぬ。

要するに、レーニンは「市民のいない市民的國家」と平然言って澄ましており、平田氏が有難く拝聴しているということである。

この一事に平田氏の「市民（社会と）社会主義」の外郭が示されていると言うのは過ぎたことだろうか。

先にも紹介したように、ソ連の一論者さえ「市場社会主義」が言葉のアヤに過ぎないと言った。「市場社会主義」がそうなら、当然「市民社会主義」も同じである。平田氏がフランス社会党など西欧社会民主（主義）党についてののみ言うのであったなら、言葉のアヤ止まりに異存を敢えて唱えまい。

ただし、西独の社会民主党は、ゴードスベルクでマルクス教との絶縁を宣言したし、産業・企業の国有化を推進した西欧社会主義政策は今や全面的後退・破棄の体たらくである。社会党ミッテラン大統領のフランス政権は保守党シラク首相とのいわば合併である。イギリスでは労働党の出番は一向に見えて来ない。ついさっき、ポルトガルでも、与党社会民主党と野党第一党の社会党が企業国有化をうたった現行（社会主義への道を定めた76年）

憲法の改正に合意し、国有企業完全民営化が動き出すに至ったと知った。(日本経済新聞, '88・10・18)。フランチイズ日本社会党は、政権獲得の意欲さえ失い、審議拒否という名の職場放棄、山猫ストを繰り返すのみ。何のための国会議員か。

体制的に市場経済の土壌が残されている国では、後悔しながらも、元に戻れる受皿がある。政治体制の単純明快な目安は複数政党存在である。

ソ連について言えば、政策の面で、ブレジネフ党とゴルバチョフ党が一つ共産党であるとは思えないくらい隔たりがある。つまり、私たちの政治感覚では、与野党間の政権交替があつて然るべき政策転換である。

日本で、自民党の永久政権化かと思える程の長期政権担当について、「革新」派は口惜しげに、また憎々しげに「政権たらい回し」と扱き下ろす。

だが「革新」派が政権を取ったらどうなるかの見本は、彼らの目標社会主義国全てにもっと酷い形で終始一貫行なわれて来た「政権たらい回し」である。中には何と建国以来40年、ただの一回のたらい回しさえ行なわれず、「王朝」体制化している国もある。そのことを彼らはほとんど忘れている。

ただし、日本と社会主義国の違いは、日本では野党が存在しても弱過ぎて政権に手が届かないでいるからであり、社会主義国ではそもそも野党自体存在が許されないで来し、今後も許される見込みはないという点である。

ゴルバチョフ書記長は言う。「わが国には野党というものはない」(前掲書, 66頁)。これは、「過去になかったし、現在になく、将来もあつてはならない」と読むべきだろう。それについてのプログラムは何もない。

ゴルバチョフ書記長は「社会主義と民主主義の結合」を目障り耳障りになるくらい幾度も唱える。またしてもレーニン。「レーニンは、社会主義と民主主義は不可分だと言っている」(同, 38頁)。何時、どこで? 典拠は示されていない。

民主主義についてのレーニンの言説を、私は違った印象で受け止めていた。『国家と革命』(中央公論社, 世界の名著, '66) からである。

「社会主義のもとではどのような民主主義も死滅するだろう……」(545頁)

「国家の廃絶は同時に民主主義の廃絶であり、国家の死滅はまた民主主義の死滅でもある……」(549頁)

「共産主義だけが、真に完全な民主主義を与えることができるのだ。そして、この民主主義が完全なものになればなるほど、民主主義はますます急速に不必要になってゆき、ひとりでに死滅してしまうであろう」(556頁)

どうも焦点が定まっていない。しかし、社会主義権力者には重宝がられた。そして今も。どの社会主義国でも、民主主義が欠如(否! 死滅)しているのは、民主主義が完全であるからである!?

私とても、完全な意味の市民が、この地球上に存在し得ているとは言えない。実現するのが何時のことかは、誰にも分からない。しかし、より市民の名に相応しい存在が住む市場経済支配体制社会が、住民を道連れに引きずり込み市民性を抜き取ることで成り立った計画経済支配体制社会に対して、圧倒的に優位であることに、歴史の大潮流を見ることは出来よう。

## あとがき

資本主義と言ひ社会主義と言つても、ともに全体像は複雑怪奇な生物体である。それぞれが「種」の進化過程の産物であることは間違いない。「個体」として見るか、「種」として見るか、その観点の違いによって、両者間の異同認識も異なる。

ヒトとチンパンジーは、個体的には殆ど質的差異がないくらい相似的である。個体を成り立たせている諸要素で、一方にあって他方にはないというのはあるまい。つまり、静止的には一対一対応的である。しかし、歩く姿となると、つまり運動的には一対一対応性が崩れる。二足歩行において、衣・食・住において、性において、対話において、等々、種間が隔たる程度に依じて一対一対応性の崩れは広がる。

種的には、生態・動態ともに個体的以上に非相似性が見られる。一々列挙するまでもあるまい。しかし、必要な限りの点を一つ挙げると、「交換」である。これは、実は、ヒトと他の動物区別の基本的ポイントに外ならない。このことを、25年前、私は「交換のないところに人と人との関係（あるいは人間という規定）は実在しえない」、「交換のない……社会というものはありえない」（『価値と市場』、鹿児島県立短大「商経論叢」第12号、'63、54～55頁）と言ひ表し、近くは「人間と交換」（本誌、第33号、'84）でも論じた。

種的に最近隣のヒトとチンパンジーの間には、厳として両者を隔てる溝があった。しかし、両者進化の道程を反れ合ったのは、はるか何百・何千万年前のことであつた。

反れ合いの時間差が途方もなく大きいので、資本主義・社会主義兩種間差異は、当然ヒト・チンパンジー間の比ではない。さすが社会主義種も、このまま進化路線を一直線に辿つても、レーニンが望んだ「一社会一工場」に到達する見込みは立っていない。マルクスが言うように、旧社会の母斑が矮小化されて残り、種生存を蔭ながら助けている。商品・貨幣、価格、賃金、等々。そして今、種全体が立往生に直面している。既定路線を進むべきか、退くべきか。

ところで、一体社会主義種の進化は「進行進化」だったのだろうか、それとも「退行進化」だったのだろうか。「進行進化」は同義反復表現であり、「退行進化」は自家撞着表現である。それではジレンマだ。考えられる理由のポイントは、資本主義種進化が自然的であるのに対し、社会主義種のそれが人為的であるという違いにありそうだ。

社会主義は「一社会一工場」を遠く目指して、ひたすら建設用地のための更地造成に励んだ。もちろん、旧体制種（要素）は邪魔物・障害物であるので破壊の対象である。問題は、目指す方向である。「革命」など性急に起こさなければ、進化は自然に進行したであろうに、もし方向を誤まったら、誤まり程度に応じて、種全体にバイアスが生じ、畸型化せざるを得ない。今の社会主義の現状はどうもそれを示しているように思えてならない。端的に言えば、なまじっか唯物弁証法だの唯物史観だの「科学的」社会主義なんぞ自画自讃するマルクス教に取り付かれたばっかりに、何疑うことなく、後戻りの方向を選んでしまったと考えたほうが、今日の事態をよく説明できるということだ。その判断の決め手が「交換」である。それに素直に従ったのが資本主義種であり、それを無理に押え込もうとしたのが社会主義種である。

この「交換」系に商人、市場、市民がある。

果たして、社会主義種はそのまま種的標識を残しながら、自然の進化軌道に乗り直すこ

とが出来るものかどうか。私は基本・中心カテゴリーに焦点を当てて、私なりの判断を示した。しかし、私の判断は、自分には辛いことだが、客観的にはむしろ当たらない方が望ましくもある。「貧しいけれど、楽しい我が家」と言うではないか。

ところで、これを書き終えて、ふと気付いたことがある。

- 「市場社会主義」は「『市場』社会主義」,「市民社会主義」は「『市民』社会主義」と読まれてきたが、それぞれを「『市場社会』主義」,「『市民社会』主義」とも読める。これで行くことが出来れば、大賛成である。

ただし、「計画社会主義」は「『計画』社会主義」,「『計画社会』主義」のいずれでも変わり映えしない。

- 日本に「文明」,「文化」の年号があった。文明は、1469年～1486年（'67～'77に応仁の乱,'82に義政銀閣寺,'85に山城国一揆）。文化は1804年～1817年（'04にロシア使節レザノフ長崎に,'08に間宮林蔵カラフト探險,'15に蘭学事始）。これは蛇足であるにしても、何故か気に懸る。

- ついとうっかりと抜かした一事,しかも大事な一事があった。言葉が事実に行先しているのが、特にソ連の状況である。それは、グラスノスチがペレストロイカに行先しているのに対応する。だが、グラスノスチの声は高いが、この最後の一線、「印刷・出版」の自由を未だに上下両者不問に付している。この点について、藤村信氏に教えられた。

「……協同組合企業が奨励されているにもかかわらず、国家から独立した協同組合の出版企業だけは除外されています。……それは用紙と印刷器械の不足による……たてまえですが、実は、1987年10月23日交付の協同組合出版業禁止令というれっきとした法律が存在しているのだそうです」（「革命をよみなおすソ連く上」,世界,'88・9）。コピーさえままならぬとは聞き知っていた。これでは、言葉すら先行も危ういではないか。何おか言わんや。また、語る時間もない。

- 回顧するに、少年時代、あるきっかけで、トルストイに接し、『全集』を殆ど継続的に読んだ。訳者では中村白葉の名が一番記憶に残る。大作は措いて、数多くの小品のうち、「光りのあるうちに光りのなかを歩め」が、何故か真っ先に記憶の箱から飛び出す。

以来、釣られて、ドストエフスキー、ツルゲーネフにも親しんだ。青年時代（大学に入って）、誰だったかの「鋼鉄はいかに鍛えられたか」等の作品にも接したが、後にスターリン最高検閲官許可作品だと知って以来、ロシア文学ならぬソ連文学ではパステルナーク、ソルジェニーツィン以外、殆ど読むことがない。勢い、ソ連に言及するところ多かったが、映画「石の花」を見た時の感動を再び味わいたいものだ。（'88・10・26）